

母と子のための

信心増進物語



第四十五回

無限の哀れみをもって人々にお慈悲

私たち人間の運命は《一寸先は闇の夜》のように、まったく先行きが分かりません。何を頼りに歩み進んで行ったらよいのでしょうか。

今回は、この世で一番頼りになるものは何か、何をするのが大事かを教えて下さるお話です。

「大悲の誓願から同情心へ」という話

むかし仏さまが王舎城の竹林精舎におられた頃のことです。仏弟子の中でも最長老の一人であった目連尊者は、ある時ふと、

「仏さまがあのようならあらゆる難事を忍んでこれられ、恐ろしい危険をおかし、あらゆる

《仏教説話に学ぶ》

佛立信者の人生観

作・三河 信吾

苦行に耐えられて、多くの人々の苦悩を救われるという、至大至高の同情心は、いったいどのように修得されたのであろうか――

「私さま、大悲心を修得されたことについて少しばかりお教えのほどお願い申し上げます」とお尋ねしたところ、仏さまは、

「私はすべての人々に大悲を持っている。それは人々が地獄に墮ちて様々な苦しみを受けているのに対して、私はその者たちの犠牲となつて、代わりに苦しみを受け、しかも耐え得ざる苦悩を受ける時に、少しの憂いや悔いも抱いたりしない。このように人々の苦を一身に引き受けて彼らをして地獄の苦から救い、人界に生じさせてやがては悟りの境地に入れるようにお願い、私は精進してきたのである。」

また、目連よ、私は過去に菩薩であった頃、すべての人々を正しき道に入らしめようと、たとえ多くの人々から悪口を言われ、罵られて、刀、杖、瓦石をもって我が身に危害を受けようとも、その人々の行為に対して怒りや憎悪の念を起すことはなかった。目連よ、私はこうして大悲の同情心を養ったのである」

仙人が我が身を焼いて光明を放つ

「ここで仏さまは一区切りつけ、さらに、「目連よ、過去にこういう話がある」

と、次のような話をお述べになられました。

ある行商人の一行が、先を急ごうとやむを得ず夜間も歩こうとしたところ、道に迷ってしまった。それこそ墨を流したような闇夜であ



ったために、彼らは一歩も進むことができず、また、どこといって夜を明かすべき場所とてなく、途方にくれるばかりで、そこで誰とはなしに、

『天でも龍でも夜叉でも、何でもよい。我々を哀れんで、この暗闇の道に光明を与え、正しい道を教えたまえ』

と悲痛な声で叫んだのであった。

その時、近くの森の中の草庵に住む外道の仙人がこの悲痛な叫び声を聞いて、(気の毒に、この暗闇の中で道に迷って困っていると見える。もし自分が救つてやらなかったら彼らはトラヤオオカミなどに襲われて、命を奪われるかもし

れない)と思い、行商人の一行のところにいき、「皆の者、心配することはない。いま、私が光明を放ち、正しい道を教えてあげましょう」と大声で叫んだ。こうして途方にくれている一行を安心させておいて、この仙人は身につけた衣に油を注ぎ、火を点けた。あたりは激しく燃え盛る炎に照らされ、行商人たちの進むべき道がはっきりと示された。危急を救われた一行の頭は、仙人が自分の身を燃やしつづつあるのを驚きをもって見ながら、仙人に向かつて、

仙人とは実は仏さまの化身であった

「あなたは身を燃やしてまで私どものために光明を放つて下さった。御礼を申し上げます」

自らの身を燃やし、道に迷える人々に正しい道を示されたこの仙人は、かねてからの大願を實踐した功德で、燃え盛る炎に包まれたはずなのに、火傷の跡もなく、元のままであった。夜が明けて仙人が無事であったことを見た一行は、(この仙人は我が身を焼いてもこのように火傷一つできていないところを見ると、必ず大行をなし遂げられた、大徳のあるお方に相違ない)と、仙人に対する大いなる敬いの念を起こした。

一行の頭が、

「私どもはどのようにしてこのご恩に報いたらよろしいのでしょうか」

と尋ねたところ、仙人は、

「いや、別にこれといった報恩をするには当たらない。あなた方は今後、努めて善行を心がけ、欲に駆られての放逸を慎みなさい。それが私の微徳に対する何よりの報恩になるのだ」と言う

と、一行の頭は、

「私どもの救命の大神人たる仙人のお諭を、これからは固くお守りすることを誓います」と御礼を述べて立ち去っていった。

仏さまは、終わりに目連尊者に向かつて、

「この話はこれで終わるが、目連よ、この話の中の仙人というのは誰のことだと思ふか。それはこの私なのである。そして行商人の一行とは、いまの私の弟子たちのことである」と明かされました。

- ◇
- ◇
- ◇

このように仏さまは、暗闇のような人の世にあって、不安におののく人々に、いたずらに恐れぬようにと安心させ、邪道に踏み迷った人々に正しい道を示し、清浄な眼なき人々には淨い眼を与え、重病に悩む人を治療せしめるように、無限の哀れみをもって多くの人々にお慈悲を垂れ給うたのです。本当に有難いことですね。

御教歌

苦しみを楽しみとして 行ずれば
難は菩薩の 積功累徳